

石橋宏 提出 学位請求論文（課程博士）

『古墳時代石棺秩序の復元的研究』 審査要旨

### 論文の内容の要旨

本論文は序章墳墓における石棺研究の意義、第1章讃岐における石棺の創出と伝播、第2章竜山石製長持形石棺の石棺秩序、第3章舟形石棺の石棺秩序、第4章畿内系家形石棺の成立と石棺秩序の変容、第5章製作技術からみた石棺の系譜、終章石棺秩序と古墳時代社会、からなる。

序章では、間壁忠彦・岩崎卓也・和田晴吾らの機能に関する研究を挙げ、石棺が畿内で創出されたとする見解と、讃岐で創出されたとする見解とでは歴史的背景に対する認識が分かれるとして、石棺形式と石棺秩序の変化が政治的画期に対応するのか否かを汎列島の視点と地域性的視点から検討する必要があるとする。次いで、後藤守一・小林行雄・和田晴吾の研究成果を挙げ、石棺研究には他界観や古墳築造、納棺儀礼との関係が重要とする。また、石棺出現以前から用いられていた割竹形木棺に関して岡林孝作の研究を挙げ、木棺と石棺を形式分類した上で、古墳時代の時期区分と暦年代、製作技術についての概念規定を行う。

第1章では、石棺に用いられた石材・製作技術・製作者集団・編年に関する研究成果を整理して、讃岐製石棺を材質によって鷲の山石製と火山石製に大別し、これらの棺身と棺蓋の形態分類と編年、石棺埋

設位置を詳述する。次いで、棺蓋を平面形から小口が垂直なもの（Ⅰ形式）、小口が斜面をなすもの（Ⅱ形式）の2形式、横断面形からABCの3類、棺身をa b c d eの5類に細別して讃岐製石棺の変遷を述べる。次に、鷲の山石製石棺と火山石製石棺の相互関係に触れた後、①石材加工技術、②割竹形木棺との比較、③石棺の埋葬法、④石棺の形態、⑤石棺秩序、⑥石材の開発の諸点から、讃岐における石棺の発生が倭王権の主導の下に行われたとする。さらに、①讃岐製石棺の形態と縄掛突起の位置、②突帯と直弧文、③製作技術、④埋葬法から、讃岐製石棺の技術と埋葬法が筑前、肥前南部、肥前北部、肥後中・南部、越前、駿河、出雲、丹後、陸奥へ波及したとする。また、兵庫県竜山石製長持形石棺の製作には讃岐製石棺製作者が関与していたとする。

第2章では、形式分類と編年から長持形石棺1類がⅠ形式からⅡa形式、さらにⅡb形式へ発展したとし、大阪府古市・百舌鳥古墳群、奈良県佐紀盾列古墳群・馬見古墳群・新庄古墳群・室古墳群・国見山北東麓古墳群など、畿内の大古墳群でも全長200m以上の大前方後円墳の竪穴式石槨に長持形石棺が用いられたとする。また、和田編年の7期から8期に衰退するとされてきた長持形石棺Ⅰ類が和田編年の9期まで存続したとする。他方、九州の舟形石棺と馬門ピンク石製家形石棺も長持形石棺を頂点とする畿内の階層構造に新たに組み込まれた結果とする。さらに、長持形石棺が明確な石棺秩序を有し、畿内と兵庫県では墳形と墳丘規模によって長持形石棺の規模と縄掛突起の数が規定されていた反面、周辺地域ではこのような規定がみられないとす

る。

第3章では、竜山石製長持形石棺1類に見られる石棺秩序が長持形石棺2類と舟形石棺にも存在するか否かを検討した結果として、丹後の長持形石棺には竜山石製長持形石棺製作者集団の関与が認められないこと、讃岐の技術によって始まった越前の舟形石棺では初期には形態に差があったものが、後に棺蓋の縄掛突起の数と位置が長持形石棺1類に統一されること、東北では舟形石棺・長持形石棺2類・畿内系家形石棺のいずれにも倭王権からの石棺情報が正確に伝わっていたとする。さらに、関東では倭王権から技術者が派遣されて長持形石棺が作られたことが明らかな群馬県以外の地域にも長持形石棺の影響を受けた箱形石棺や竪穴式石槨の蓋石に縄掛突起が付くものがあり、太平洋側から河川沿いに石棺情報が伝わったとする。

次いで、石棺製作が最も盛んであった九州を玄界灘沿岸、有明海沿岸、豊後水道沿岸、日向灘沿岸、志布志湾沿岸の6地域に分けて検討した結果として、九州は石棺の製作と使用が盛んな地であるが、長持形石棺の確認例はわずかに3例のみであり、長持形石棺の影響は限定的であったとする。このことから、九州では石棺の規模や突起の数による階層構造は確認できず、階層性は石棺ではなく埋葬施設によって示されたとする。

以上のことから、長持形石棺1類が王権を形成する畿内首長連合の棺、舟形石棺が地域首長連合の棺であったとし、同族関係を基礎とする結合を保障・表現する役割を石棺が担ったとする和田晴吾の見解に賛同する一方で、長持形石棺と船形石棺との位置付けについてはなお

検討の余地があるとする。また、毛野第3段階の刳貫式舟形石棺を長持形石棺1類が示す石棺秩序を表したものとする。さらに、長持形石棺1類と2類、舟形石棺を総合的にみると、倭王権から石工が派遣されて作られた長持形石棺1類、倭王権から石工が派遣されず1類を模倣して現地で作られた長持形石棺2類、刳貫式舟形石棺の三者で石棺秩序を表したとする。

第4章では、まず研究史を概観した上で、家形石棺研究に必要な視点として、①家形石棺の定義と系譜、②家形石棺編年の再検討と横穴式石室編年との対応関係、③家形石棺を製作した石工集団の動態、④石棺秩序と多数地域を視野に入れた研究が重要とする。

家形石棺の分類と編年に関しては石材毎に馬門ピンク石製家形石棺、竜山石製家形石棺、二上山白石製家形石棺を検討する。具体的には、畿内・山陽・山陰・九州・伊勢・濃尾・加賀・駿河・関東・東北の石棺の例を挙げて畿内との関係を述べ、畿内の家形石棺の変遷を畿内1期（5世紀後半）、畿内2期（5世紀末～6世紀前半）、畿内3期（6世紀中葉～7世紀前半）、畿内4期（7世紀前半～7世紀後半）と設定し、時期毎の変化とその意義について述べる。その前提となる畿内型家形石棺を対象に家形石棺の分類と編年案を提示した上で、山陽・山陰・九州・伊勢湾・濃尾・駿河・伊豆・関東・東北・北陸の家形石棺にも畿内と同様の石棺秩序が存在するか否かを検討した結果として、家形石棺が出現した畿内1期から最終末の畿内4期までの間に多少の地域的変化が見られるものの、各時期を通じて畿内の倭王権の影響が東北まで及んでいたと結論付ける。

第5章では、形態の伝播に加えて製作技術の伝播について検討する。特に石棺に残された工具痕から、鑿叩き技法、鑿小叩き技法、手斧削り技法、手斧叩き技法、磨き技法（ナラシ技法）などの在り方について地域毎の共通性と変異性を検討した結果として、硬質石材加工技術と軟質石材加工技術という二つの技術系列に分けられること、これら二つの技術系列が最終的に統合されたのが斉明天皇の頃と結論付ける。

終章では、第5章までに述べてきたことを受けて、石棺秩序が古墳時代社会全体の中で果たした役割と意義について総括し、讃岐における石棺製作の開始に際して讃岐の舟形石棺に見られる高度な石材加工技術が倭王権から提供されたとし、長持形石棺の創出には讃岐の工人が関与していたと推測する。また、古墳時代後期に一世を風靡した家形石棺に関しては、畿内3期に石棺秩序が整備された結果、上位首長から群集墳の被葬者までに採用されたとする。そして、目に見える古墳の外形に示された前方後円墳体制と同様に、墳丘内に納められた石棺にも畿内を頂点とした整然とした秩序と序列があったと結論付ける。

### 論文審査の結果の要旨

3世紀から7世紀まで約400年間続いた古墳時代には、前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳・双方中円墳・上円下方墳・八角形墳など多様な墳形の古墳が築かれ、遺体と副葬品を納める石室も竪穴式石室から横穴式石室へと変化した。また、遺体を納める棺にも割竹形木棺・箱形木棺などの木棺、舟形石棺・長持形石棺・家形石棺などの石棺、

漆を用いた夾紵棺、焼物製の陶棺等々、様々な形と材質が出現した。本論文はこれら古墳時代の棺のうち石棺を直接の対象とした論考である。

古墳時代の葬制の中では、前方後円墳を頂点とする前方後円墳体制によって様々な墳形の古墳が築かれたとする概念が古くから説かれてきた。これら外部から視覚的に確認可能な墳形による研究に対して、古墳内部に内包され外部から視認し難いものを代表するのが棺であり、明治以来様々な研究がなされてきた。これを整理し直したのが序章と第1章である。ここでは現在までの研究成果を詳述すると共に、今後の石棺研究に必要な項目を挙げ、論者の目的を標榜する。

第2章以下では本論文で取り上げた石棺に関して、形態分類・材質・製作技法・製作地・分布・年代を詳述する。特に注目されるのが製作技法であり、写真図版や実測図では理解不能な細部の技法が事細かに説かれる。これは単に発掘調査報告書や論文を渉猟しただけでは説き得ない点であり、論者が一つ一つ現物を観察して回ったことを雄弁に物語っている。まさに足で稼ぐ考古学の原点とも言うべき姿勢であり、石棺が古墳全体に及ぼした影響と意義を明らかにしたものとして高く評価される。

本論文の第二の優れた点は、遺体を納める棺自体の機能・分布・年代などの属性を明らかにした上で、それが古墳築造という古墳時代の葬制全体の中でどのような位置にあったかを、墳形・副葬品その他、古墳のもつ様々な属性と関連させて捉えた点で、石棺の階層的使い分けに論究したことである。墳形を主とした前方後円墳体制にも匹敵す

る階層性を、石棺という遺体を納める道具から論じたのも論者が最初であり、石棺という一つの資料から古墳全体に及ぶ階層性を論じた記念すべき論考である。ここには古墳全体に対する論者の長年にわたる研鑽と幅広い視点、視角、斬新性が現われている。

本論文は古墳時代前期から後期に用いられた石棺に関して現時点での到達点とも言える論究であるが、竪穴式石室と割竹型木棺という畿内を象徴する二大墓制要素のうち、竪穴式石室という石室構造・副葬品などが変化しないのに対して、なぜ棺だけが木棺から石棺に変わったのか、その理由についても言及する必要があるだろう。

以上、本論文は古墳研究に新しい視点をもたらし、今後の古墳時代研究に一つの分野を切り拓いたものとして高く評価でき、提出者石橋宏は博士(歴史学)の学位を授与される資格があるものと認められる。

平成24年2月16日

主査	國學院大學教授	吉田 恵二	㊞
副査	國學院大學客員教授	杉山 林 継	㊞
副査	立命館大学教授	和田 晴吾	㊞